

「狭間のわれら」

夜白
星萌

戸田 花純(17) とだ かすみ

2月8日、高3、3年2組、一人っ子

何でも引き受けてしまう性格。

恒星に指名され学級委員を2年からやっている。

高1の5月まで恒星と仲がよかったが6月から苦手になる。

日々、恒星にからかわれ鬱憤が溜まっていた。

母と父は放任主義。母は夜な夜な出かけ、父は一人でドライブ。

頼りにしてた祖父母は小6で祖父が、中2で祖母が亡くなった。

北海道か九州の大学に逃げたいが、誰もいかなない神奈川県指定校推薦を無駄にしないよう担任から薦められている。

加藤 大空(17) かとう そら

9月17日、高3、3年2組、一人っ子

同性愛者。高2の秋、隣のクラスで同じ体育委員だった恒星と体育祭準備期間を経て告白するもきもがられ、恨みをためていくことになる。

ほどよい親子仲ゆえ期待されており、同性愛者を告白できないまま。

中学2は彼女もいた、思春期特有の悩みを抱えた(男女どちらが好きか)を悩んだ相手と付き合っていたので彼氏もいたが受験に集中したいと別れを切り出されたものの彼女をつくっていたことに深く傷ついた。

中本 恒星(17) なかもと こうせい

8月4日、高3、3年2組、兄がいる2人兄弟

高1、出席番号が前後だった花純と仲良くなり好意を抱くも、クラスのヤンチャな雰囲気になれちゃっかいかいをかける。クラスの中心的人物。

小学生からバスケをしており、高2冬でスポーツ推薦をもらい進学先が決まっている。

猪原 蓮華(28) 夢追い人、フリーター。ほぼ諦めている。

下の名前は蓮華だがアーティスト名のため嫌い。

本当は蓮華という名づけられた名前が好きでアーティスト名にまでするが、売れない、力が無い自分を見るような気持ちになってしまったため嫌い。

死にたい気持ち、無性に海が見たくなった。

警察 江ノ島まわりで働いている

1 西校舎の階段の踊り場

明転。

階段の踊り場で向かい合っている花純(17)と中本(17)。

階段の下にゆっくりと歩いてくる加藤(17)。(少ししか見えない)

3人とも制服を着ている。ポケットには折りたたみ財布と携帯が入っている。

花純 何て？

中本 だから、俺と付き合おうって

花純 ……

中本 悪い話じゃないでしょ？

花純 ……

中本 3年間同じクラスだし、高校生は今年で終わりだし、今しかないでしょ

花純 ……

中本 今しかできないこともあるんだしさ

花純 ……で

中本 で？

花純 私にメリットあんの？

中本 花純、3年間フリーじゃん？

高校3年間は可哀想だし、今からなら夏休みもあるし今しかできないこととか
できるわけで

花純 今しかできないことって？

中本 ……制服デートとか？ もう大人だしやることもやれるし

花純 いつ？

中本 え？

花純　いつ、私が、いつ私がそんなことしたいなんて言った！？

中本　落ち着けよ

花純　学級委員とか、毎時間の黒板消しとか、いつ私がしたいって言ったの！？

中本　……

花純　言ったことないよね？　私そんなことやりたいなんて一度も言ったことない！

中本　な、なんなんだよ

花純　もう、私で遊ぶの辞めて

中本　そんなつもりじゃ

花純　もうやめてよ

中本　俺、1年の時からずっと好きだったんだよ(花純に近づく)

花純　いい加減にして(と、中本を突き飛ばす)

中本、階段から落ちうめき声をあげる(客席からは見えない)

花純、驚き腰を抜かす。

階段の下から加藤の「え？」という声が聞こえる。

花純　違うの、私……違うの

花純は立ち上がり走り去る。

少しの間があつて花瓶が割れる音とともに暗転。

2　西校舎の廊下

壁をつたいながら急いでいる花純。

加藤は肩からショルダーバッグをかけ、花純の後を小走りで追いかける。

ショルダーバッグの中には財布と携帯と筆箱が入っている。

加藤　　ねえ

立ち止まる花純。

花純　　そんな、そんなつもりなかったの

突き落とすつもりじゃ

加藤　　突き落とす……

花純　　見たんじゃ、ないの？

加藤　　……うん

花純　　ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい(と、泣き崩れる)

加藤　　落ち着いて、つてできるわけないよな

花純　　ごめんなさい、本当に、ごめんなさい

加藤　　とりあえずさ、ほら、あそこいこ、美術準備室

加藤、花純の肩を抱き美術準備室へと移動する。

3 美術準備室

キャンバスが複数乱雑に並び、パレットや絵の具、汚れたエプロンなどが椅子にかかったりしており、少し不衛生な部屋となっている。

加藤や花純を丸椅子に座らせた後、加藤も丸椅子に座る。

加藤　　汚いよね、ごめん

花純 ううん、でも、タイミングよかったかも

加藤 タイミング？

花純 使われてなくても教室は鍵かかっているイメージだったから

加藤 ああ、ここは特殊かも

花純 そうなの？

加藤 閉め忘れてるの、ほら、美術の先生っておじいちゃん先生じゃん？

花純 じゃあ、これだめなやつじゃん、出なきゃ

加藤 大丈夫だよ、見つかったことない

花純 ……よくくるの？

加藤 1人になりたいときは、たまに？

花純 そうなんだ

加藤 ……ここには2人しか居ないよ

花純 え

加藤 警戒して緊張してるでしょ、体強ばってるから

花純 まあ

加藤 俺は何も誰にも言わないよ

花純 ……

加藤 信じられるわけないか

花純 ごめん

加藤 じゃあさ、自己紹介でもする？

花純 え？

加藤 こんな時に？ って思ってるでしょ、こんな時だからだよ

花純 でも、知ってるよ、加藤くんでしょ？ 同じクラスだし

加藤 じゃあ下の名前も？

花純 それは

加藤 加藤大空、大空って書いてそらって読むの

誕生日は9月17日だからまだ17歳、戸田さんは？

花純 戸田花純、私も誕生日まだだから17歳、です

加藤 いつなの？

花純 2月8日

加藤 早生まれなんだ

花純 そう、ねえ、加藤くんは何であそこに

加藤 (遮るように)呼び捨てで呼んでもいい？

花純 あ、うん

加藤 じゃあ改めてよろしく、花純

花純 そっちなんだ

加藤 そっち？

花純 てっきり名字かと

加藤 名前呼びの方が仲良くなれそうじゃん

ずっと花純と話してみたかったし

花純 そうなんだ

加藤 ねえ、俺のことも加藤くんじゃなくて大空って呼んでよ

花純 え

加藤 いいじゃん、同じクラスなんだから呼び方変わることなんてよくあるでしょ

花純 そう、かな

加藤 そうだよ、ねえ、本題に入っている？ ていうか入るね

なんで恒星、中本恒星を突き落としたの？

花純 それは

加藤 それは？

花純 ついカッとなって、でもわざとじゃないの

今まで色々あって、でも我慢して、だけどもう嫌になって気づいたら

恒星は階段の下で、私は階段の踊り場で腕を伸ばしてて

加藤 そっか

花純 こんなつもりじゃ……

加藤 ねえ、ここから逃げ出したい？

花純 え？

加藤 花純は、ここから逃げ出したい？

花純 何言ってるの、逃げられるわけないよ

私どうするべきかな、このまま警察を待つだけかな、それで、それで？

加藤 中本恒星、死んでたよ

花純、椅子から崩れ落ち、えずく。

加藤も椅子から立ち上がり、花純のそばへしゃがみこむ。

加藤は少し笑みを浮かべている。

加藤 もう一度聞く。君はこのままここにいたい？

人殺しとして生きたい？ 人殺しとして生き続けたい？

花純 ……怖い、逃げたい、でも許されないよ

加藤 逃げようか

花純 どこへ？ できるわけないよ

加藤 俺にも価値はないから、こんな世界で生きていたくないから

2人で逃げよう。1人ならできなくても2人ならできそうじゃない？

花純 ……わかんないよ

加藤 とにかく、ここじゃないとこ、こんな世界から消えよう

逃げよう、もっといいとこに

花純 樹海にでも行くの？

加藤 まさか、まだ死なないよ

花純 じゃあ、どこに？

加藤 もっと、逃避行らしいとこ

4 小田急線・電車内

乗車人口は少なく、加藤と花純は隣に座るが、付近には人が居ない。

車内アナウンス「まもなく、終点、片瀬江ノ島です。お降りの際は、お忘れ物をなさいませんよう、ご注意ください。小田急をご利用くださいますと、ありがとうございます。ございました」が流れる。

花純 江ノ島いくの？

加藤 そう

花純 逃避行って、もっと遠いところ行くと思ってた

加藤 思い込みだよ

花純 江ノ島なんて、同じ神奈川県内だよ？

加藤 県内だったらだめなの？

花純 そういうことじゃなくって

加藤 ……

花純 なんで江ノ島なの？

加藤 海っでもうすぐ夏！ って感じさせてくれるし

自分がちっぽけにも感じさせてくれると思わない？

何ならどこかへ連れて行ってくれそうだし

江ノ島は観光地だから食べ歩きもできるよ

花純 海なら江ノ島じゃなくてもいいじゃん、江ノ島なんて行き止まりだよ

すぐ捕まっちゃう、きっと今頃消えた私達を、恒星を殺した私を探してる

加藤 どうかな

花純 もう時間の問題だよ

加藤 西校舎の階段なんて人は来ないし、防犯カメラもない

4組は昨日親睦会で牡蠣にあたって欠席も早退も多いよ

だから先生達もてんやわんやーってなってそうだけどね

花純 そうなんだ

加藤 ほら、ついたよ

5 江ノ島

日本語、海外の言葉が少なからず聞こえてくる。

穏やかな波音も流れている。

うつむく花純とのびをする加藤。

加藤 久々に江ノ島来たなあ

花純 ……

加藤 俺らと違って快晴だね

花純 梅雨のくせに、生意気な空だよ

私の気持ちも知らないで

歩き出す花純の腕をつかみ、別の道へ歩き出す加藤。

花純 どこいくの？ 海は？

加藤 先にあっち行こう

6 弁財天仲見世通り

スクリーンに弁財天仲見世通りの看板が映し出される。

加藤 まずは食べ歩きでしょ

花純 危機感なさすぎない？

加藤 今くらいいいでしょ

ため息をつく花純と、キョロキョロと周りを見渡す加藤。

花純 ……たこせんとか食べるの？

加藤 それはありきたりでしょ

花純 逃避行で海選んだくせに？

加藤 それは言うなよー

(立ち止まり)これ

花純 これ買うの!?

加藤は2つデニムマンを購入し、受けとると1つを花純に渡す。

7 ハルミの脇道の奥の海

海の波の音と、花純と加藤が砂上を歩く足音がしている。

花純と加藤はデニムマンを食しながら海へと向かい、歩いている。

加藤は「海だ」と小走りに海に近づき、花純は歩いて追いかける。

立ち止まる加藤の横にきて立ち止まる花純、波の音だけが鳴っている。

加藤 食べるの遅いね

花純 一口が小さいって言ってくれない？

加藤 口が小さいのか

花純 コンプレックスだったらどうすんの

加藤は海に向かって深呼吸をしている。

花純 海好きなんだ

加藤 喋るより食べる口動かして

花純 はいはい

加藤 ……海って広くて大きくて、粹にとられてなくていいよな

花純 海にそんな感情抱いたことないな

加藤 食べ終わった？

花純 お待たせしました

加藤 お待たせされました

花純 これからどうするの

加藤 海

花純 海？

加藤 ……眺めるの

花純 ……それだけ？

加藤 ……

花純 こなまま突っ立って、2人で海眺めるだけ？

加藤 ……座るか

花純 砂、だけど

加藤 あっちの岩だよ

花純 汚れない？

加藤 君は汚れてるのに？

花純 ……それもそうか

加藤と花純は大きめの岩に並んで腰掛ける。

加藤は肩からかけているシヨルダーバッグも置く。

加藤 そんなに追い詰めることなんだ

花純 当たり前でしょ

加藤 本当は俺、少し嬉しかったんだ

花純 え？

加藤 俺も、恒星に対して思うことはあったからさ

花純 わかるかも、同じクラスだし

加藤 ……

花純 酷いよね、恒星の上空へやってきたこと

人間がやることじゃないよ

先生も見えて見ぬ振りするし

加藤 ずっと聞きたかったことがあるんだけどさ

花純 何？

加藤 好きだったの？

花純 え？

加藤 恒星のこと

花純 誰が

加藤 花純

花純 私が恒星のこと？ ないよ、むしろ逆

加藤 よく話してたから

花純 恒星が話しかけにきてただけだよ

加藤 凄く仲良く見えてた

花純 1年生の頃はね

加藤 仲良かったんだ

花純 最初だけだよ

加藤 きっかけは？

花純 きっかけ？

加藤 仲良くなったきっかけ

花純 入学して名字が戸田と中本で出席番号が前後だからよく話してたんだ

加藤 それでずっと仲良し？

花純 全然

加藤 違うの？

花純 6月くらいから高校デビューっていうの？

中心にいただけじゃなくてやんちゃはじめてて、性格が変わっちゃったんだよね

加藤 それまでは仲良かったんだ

花純 5月頃まではね

加藤 それ以降は

花純 ずっとずーと苦手

加藤 やんちゃはじめたから？

花純 それは私には関係ないからどうでもいいんだけどさ

加藤 じゃあ、なんで？

花純 そんなに気になる？

加藤 え？

花純 すごい聞いてくるから

加藤 気になる、面白いから

花純 私は全く面白くないけどね

加藤 早く教えてよ、なんで苦手になったの？

花純 私、学級委員なの

加藤 そうだね

花純 どうしてか、覚えてる？

加藤 恒星に指名されてた

花純 そう

加藤 まさか、それだけ

花純 それだけじゃないよ

私目立つ方じゃないって言うか、目立ちたくないのに

2年連続恒星のせいで学教委員だし、

教科ごとの手伝いも恒星が勝手に私の名前使うから先生もこき使うし、

課題は無理矢理見られるし、何でもかんでも名前出してさ

友達と話してるときもからかって、3年間もクラスが一緒なんて拷問みたいだよ

加藤 そっか

花純 大空も嫌いでしょ、恒星のこと

加藤 ……

花純 え？

加藤 じゃあさ

花純 え

加藤 恋人は？

花純 何？

加藤 恋人はいるの？

花純 いないけど

加藤 つくる気は？

花純 今はないかな

加藤 今は？

花純 卒業したらここからでたいんだ

加藤 それだけで？

花純 思い出なんかつくって離れられないなんてなりたくないからね

加藤 なんで？ なんで出て行きたいの？

花純 何でもよくない？

加藤 気になるからさ

花純 気になるって言えばなんでも聞けると思ったら大間違いだよ

加藤 ていうか大空は？ いないの？

加藤 いないって？

花純 恋人

加藤 今はいないよ

花純 今 হচ্ছে ことは、元カノいるんだ

加藤 元カノもいたね

花純 元カノ、も？

加藤 人を傷つけた代償がきちやったな

花純 聞きたいことがでてきたんだけどさ

加藤 ……

花純 聞いてもいいやつ？

加藤 聞いても面白くないよ

花純 私が面白くなくても聞いてきた人の発言とは思えないね

加藤 それよりさ

花純 ここで話そらすことある？

加藤 なんでここから出て行きたいの？

花純 ……先に教えてよ、私が聞きたいこと

加藤 嫌だって言ったら？

花純 拒否権が存在していたことに驚く

加藤 存在はするでしょ

花純 さっきまで存在してなかったんだよ

加藤 早く教えてよ

花純 またこのパターン？

加藤 花純は優しいから押せば教えてくれるって学んだ

花純 嬉しいのと最悪の学びだよ

加藤 で、何で出て行きたいの？

花純 うーん……

加藤 悩むことないって、俺と君の仲だよ

花純 今日やっとまともに話したんだけどな

加藤 だからこそ話しやすかったりするんじゃない？

花純 そうかな

加藤 大きな独り言みたいなものだと思えばいいんだよ

花純 大きな独り言ね

加藤 いつでもいいよ

花純 どこから話そうかな

加藤 どこからでもいいよ

花純 大きく2つ、あるの

加藤 2つね

花純 まずね、私の家すごい放任主義なの。母親は夜な夜な飲み歩かし、父親は毎日のようにドライブに行くの。母親の携帯には新しい男の人との履歴があつて、誰も見たくないでしょ、女になる母親なんて。元々夫婦仲は良くないのにここ最近
は家族で食卓を囲む事なんて無くて、家に居ても2人とも不機嫌オーラ丸出しで
私がそれぞれのご機嫌撮らなきや家の中息苦しくて、でも私もうまくできないと
きがあつて。そんな私の面倒をよく見てくれた祖父母ももういないの。2人
も早かったんだよ、私を置いていくの。祖父は小6で、祖母は中2の時に。私を
大事にしてくれたた唯一の人達なのに、成人式までも待ってくれなかった。みんな、
私を置いていくんだよ

加藤 それが、一つ目？

花純 そう

加藤 そっか

花純 面白くないでしょ

加藤 面白くはないね

花純 だから言ったでしょ

加藤 でも君を知れる

花純 ……変だね、変わってる

加藤 よく言われる

花純 ……

加藤 それで

花純 ?

加藤 2つめは?

花純 容赦ないね

加藤 話せるタイミングでいいよ、でもこの流れの方がきつと楽じゃない?

花純 そうかも

加藤 じゃあ話してもらおうかな

花純 家からでていきたいから、もちろん進路もその方向なの。

うちの親、変わってるから大学じゃないとだめで就職できなくて、ならいっそ遠くに進学してやろうかなって

加藤 そっちもなかなか変だね、遠くって?

花純 北海道とか、九州とか。神奈川から離れられるならどこでも

加藤 行けばいいじゃん

花純 私ね、こうみえて成績結構優秀なの

加藤 それが何?

花純 それに加えて何でも言うことを聞いてくれる学級委員、すなわち残飯処理

これに目をつけるのは? そう、先生

加藤 どういうこと

花純 指定校推薦の枠が余ってるんだって、今年誰も進学しなかったらその枠が取り消されちゃうらしくって、先生達も必死なの。戸田は頭がいい、きつとここならやりたいことができるなんて私のこと何も知らないくせに懇願してさ、見せてあげたかった。

大人ってあんな顔で迫ってくるんだね、今思い出ただけでも怖くて笑える

加藤
で？

花純
私の進路、教師までもが利用してこようとするんだよ、

神奈川なんて早く出て行きたい

加藤
これが映画とかドラマのエンタメなら東京に行くのにな

花純
東京が近すぎたね、知人にもすぐ会えちゃう

加藤
でもエンタメみたいだね

花純
エンタメじゃないよ、面白くない

加藤
面白いつて言うか、甘いね

花純
甘い？

加藤
花純も家族も先生も、みんな誰かに甘えてんじゃない

花純
は？

加藤
他人がどうにかしてくれるって

世界がどうにかしてくれるって、逃げて場所さえ変わればどうにかなるって

私だけは救われるって思ってるんだ

花純
何が言いたいわけ

加藤
自分からろくに動かないくせに、要求だけは立派なんだよ

救われたい幸せになりたいって、そこで立ち止まって吠えてるだけじゃ

何も変わらないんだよ

花純、小石を拾い加藤の足下へ投げつける。

加藤
全部本当のことだから言い返せないでしょ

花純
自分だって

加藤
……

花純　自分だって恒星たちからいじめられてたのに何もしてないじゃん

何もしなかったじゃん、それも逃げじゃん、同じでしょ

加藤　……

花純　……凶星、でしょ

加藤　俺が原因だからね

花純　え？

加藤　……

花純　何かしたの

加藤　……お金盗んだ

花純　嘘

加藤　嘘

花純　(ため息)

加藤　本当は、俺が始めて、俺が終わらせたんだよ

花純　どうということ

砂上を歩いてくる音がする。

音の鳴る方へ視線を向ける加藤と花純。

猪原(28)がやってくる。

猪原　お邪魔、でした？

花純・加藤　いや

猪原　よかった、いい天気ですね

花純　そうですね

猪原　……高校生？

花純 高3です

猪原 サボリ

加藤 あなたに関係ありますか？

猪原 ないね、ごめんね

加藤はそっぽを向く。

少し強めの波音と鳥の鳴き声になっている。

花純 お姉さんも、座りますか？

猪原 (気まずそうに)そっちの彼に申し訳ないから

加藤 座ればいいじゃないですか

猪原 え？

加藤 ここにはなにひとつ、所有物なんてないですから

猪原 難しいね、君の言葉

加藤 全部自由ってことです。全部自由なんです。

ここにくるのも、海見るのも、座るのも全部自由。

だから自分で決めたらいいんです

猪原 じゃあ、私もこの瞬間だけ、一緒にサボらせてもらうね

花純 お姉さんもなにかのサボリですか？

猪原 バイトのサボリ、フリーターなんだ

花純 大丈夫なんですか

猪原 その大丈夫が何に対しての大丈夫によって変わるかも(とヘラヘラ笑っている)

加藤 何でヘラヘラできるの

猪原 やっと終われるかも、って思ってるからかな

加藤、猪原へと体を向ける。

加藤 死ぬの？

花純 は！？

猪原 あと少しってどこかな

花純 お姉さん！？

加藤 どうかな。

死ぬやつはそんなこと言わずに急に消えるって言うし

猪原 私の回答お気に召さなかった？

加藤 どうだろう、期待したのかも

猪原 はじめましてに期待できるなんてまだまだ綺麗だね

加藤 ばかにしてる？

猪原 羨んでる

加藤 俺を羨むなんて変だね、お姉さん。

……ねえ、名前なんて言うの？

猪原 猪原、イノシシの漢字に原っぱの原で猪原

花純 下の名前は？

猪原 嫌いだから匿名にさせて

加藤 名乗らなかつたら聞かない方がいいこともあるんだよ

花純 なにそれ

猪原 いいよいいよ、そんな遠慮知らなくていいんだよ、本当は。

苦しさを生み出してそんな遠慮をも生み出す世界が悪いからね

花純 私だけ仲間はずれみたいでむかつく

猪原　ねえ、私にも2人の名前を教えてくださいよ

花純　戸田か(言いかけるもとまり)……戸田です

猪原と加藤は少し吹き出して笑い

それを受けて困惑する花純

花純　なんで笑うの

猪原　かわいいなって

花純　絶対馬鹿にしてる

加藤　俺が無理矢理連れてきたの、だから慣れてないんだよ(距離の取り方)

猪原　恋人？

加藤・花純　まさか

猪原　てっきり恋人かと思ってた、その道中だったりも？

花純　しないです

加藤　ありえない

猪原　じゃあ君、なんで戸田ちゃんをこんなところへ連れてきたの？

加藤　……

花純　私、海嫌いじゃないですよ！

猪原　本当に海に連れてきただけ？

花純　？

加藤　……関係ないでしょ

猪原　確かに、踏み込みすぎたね。ごめん。

じゃあそろそろ名前教えてもらおうかな

加藤　加藤大空、大空でいいよ

花純 え？

猪原 戸田ちゃんと大空くんね

花純 花純！

猪原 ？

花純 戸田花純です！

猪原 (花純の純粹さに笑って)花純ちゃんね

花純 はい

猪原 花純ちゃんは、なんで海に来たの？

連れられてきただけ？

花純 それは、えっと……

猪原 こっちも訳ありだったんだ

加藤 こっち、も、ってことは猪原さんもやっぱり訳ありなんだ

猪原 みんな訳あり、だね

加藤 こんな平日の昼間に海見てるくらいだし、想像はつくでしょ

猪原 想像できない人間がいるのも事実

加藤 確かに

猪原 (うつむいている花純に)花純ちゃん、何があったかわからないけど、

ここにいる2人は仲間だよ

顔を背けている加藤

猪原 海は嫌い？

花純 こんな気持ちで海を見たのは初めてです

猪原 そっか、海ってさ、広くて大きくてずるいよね

なんでも受け入れちゃうから

花純 海、好きじゃないんですか？

猪原 わからないな

花純 わからないんですか……

猪原 うん、わからない、来ちゃった

花純 どうして？

猪原 海が見たかったから、かな？

加藤、ゆつくりと猪原に顔を向ける。

猪原 きつと私も大空くんも、このタイミングで海に呼ばれたのかもね

花純 海に呼ばれるんですか？

猪原 唐突にね、海が見たい！って思ったの

気づいたらバイトにいかずにここに来てた

花純 ……

猪原 ダメだよねえ、フリーターがバイト飛んで海なんてきたら

でももういいんだ、きつともう終わるから

花純 別に、一日だけでそんな

猪原 バイトが嫌とかじゃないの、もっと別のこと

花純 ……すみません、また余計なこと聞いちゃいましたよね

猪原 全然、いいんだよ、むしろ聞いてくれた方が嬉しいこともあるからね

花純 そうなんですか

猪原 ……私ね、夢追い人なんだ。あ、でももう28だし、老いてる夢追い人かな

花純 28なんてまだ若いじゃないですか

猪原 世間から見ればね。でももう夢を追うには年を取り過ぎたのかも

花純 そんな、でも

加藤 やめなよ

花純 え？

猪原 花純ちゃんは優しいね、世界がみんなそんな優しかったらなあ

加藤 そんなこと、あるわけないよ

猪原 そうだね

花純 ……

猪原 死にたくてもさ、許してくれないんだよ

死にたくても生きなきゃいけなくて

死にたくても生かされて

死にたくてもさ、死ねないんだよ

花純 どういう…

猪原 理解ある社会なんて、やってこないんだよ

少しの間、沈黙が続き、猪原が涙ぐむ。

猪原 海はいいなあ

加藤 ……海もさ、海の中では争いだらけなのにね

花純 (加藤の腕をつかみ)絶対今じゃないよ!?

加藤 ……

花純 やめなよ……

猪原、声をあげて笑い出す。

猪原 若いなあー、羨ましいなあー

加藤 そんなことが

猪原 そんなことじゃないよ

子供は大人になれるけど、大人は子供には戻れないんだよ

若いつてそれだけで価値があるんだよ

加藤 ……それでも、早く大人になりたいけどな

花純 私も

猪原 まあ、それも答えとしてはいいんじゃない？

加藤 若いのがいいの？

猪原 将来性も、活躍する際のセールスポイントにもなって

加藤 それがいいの？

猪原 私も顔出しせず歌い手の活動とか、現役の女子高生の時に弾き語りやSNSとか²⁹にあげたら、未来は違ったのかな、こんなんじゃないかな。紅白までとは行かなくても、たくさんの人に自分の歌を届けられたかな

加藤 歌歌うんだ

猪原 なりたかったな、私も、シンガーソングライター

加藤 ……なりなよ、なってよ

猪原 私の歌を聴いてさ、頑張ろうって思ってたのに

感動してなんて言わないからさ、ただ聞いてほしかったのに

いつか誰かの希望になりたかったのに

どうしてこんなことになっちゃったのかな

3人の間に再び静寂が訪れる。

しばらくして、猪原のスマホに着信音がなる。

携帯を取り出してみつめ、苦い顔をする猪原と

その光景を眺めている加藤と花純。

猪原
行かなきゃ

猪原は腰掛けている岩から立ち上がり、帰ろうとする。

加藤
やめれば

猪原
……大人は簡単にやめられないんだよ

加藤
頭固いね

猪原
そうかも

加藤
……嫌？ 大人

猪原
嫌だね。めちゃくちゃ嫌。

でも辞める方法がないんだよね

加藤
嫌だね、それ

猪原
子どもが大人になることは喜ばれるけど、

大人が子どもでいたり、子どもに戻ることは

喜びとは反対の気持ちで受け止められる

批判されて貶されて無理矢理大人にされて

花純・加藤
……

猪原
大人になればなるほど自分に都合のいい人を善人って呼んで、

自分に都合の悪い人、邪魔な人を悪人だとか偽善者って呼ぶんだよ

自分の都合でそんな呼び方になるくらい大人の心は廃れてる

私も、そのひとり

花純 ……もしかしたら、まだいい大人に出会えてないだけかもしれないですよ

猪原 ……本当に、偉いね。

花純ちゃんはまだ信じてて偉いよ

花純 何を？

猪原 世界を、社会を、人間を

大人という怪物を、だよ

花純 別に私も大人は好きじゃないです、でも私達よりは自由に見えちゃうから

お互いじゃないものねだりかもしれない。羨ましいって思うこともあります。

それに、いつまでもそんなネガティブに、暗くいたって仕方ないじゃないですか
なら、どこか別で希望を探せたら

再び猪原のスマホの着信音になる。

3人が猪原のスマホをみつめる。

猪原 そろそろ本当にやばいかも

2人に会えて良かったよ、このまま暗い気持ちで死ぬだけだと思ってたから
話を聞いてもらって、一方的に話したただけだけど聞いてもらえて嬉しかったよ

もう少し生きて、別の場所の希望、探してみるかも

じゃあね、強く生きようね

花純 また

加藤 ……サヨウナラ

海辺を去っていく猪原。

去っていく猪原の背中をながめる花純と加藤。

加藤だけが暗い表情を浮かべている。

花純 (加藤の表情を見て) どうしたの？

加藤 強く生きるって、難しいね

花純 そうなのかな

加藤 そうだよ

花純 ……

加藤 昔、俺も自分に誓ったんだけどな(と、涙ぐみそうになっている)

花純 泣きたいなら泣きなよ

加藤 ……

花純 話したいなら話しなよ

加藤 ……

花純 無理に話す必要はないと想うけどさ

私は聞くよ、聞きたいよ、大空の話

加藤は深呼吸をして、覚悟を決めたように花純に向かい合う

加藤 俺の最後の懺悔、聞いてくれる？

花純 もちろん、きくよ

加藤 今からする話を聞いたら、きつと俺を嫌いになると思う。

許せなくなると思う。気持ち悪く感じると思う。

もう二度と俺を見たくなくなるし、

もう二度と俺と口をききたくなくなると思う。それでも聞く？

花純 聞いてあげるよ

加藤 どこから話そうかな、さっき元カノもって言ったの覚えてる？

花純 教えてくれなかったやつだね、覚えてるよ

加藤 俺、同性愛者なんだ

花純 そうなんだ

加藤 ひかないんだ

花純 今はもう普通でしょ

加藤 本当、優しい性格してるんだね

俺はさ、思春期の時は同性愛者だっけ信じられなくて

女とも男とも付き合ったの。

もしかしたらバイセクシャル、男も女も恋愛対象なのかなって。

でも女と付き合ってるときはどうでもいいっていうか、自分に嘘をつき続けるのが息苦しかった。みんなみたいに女が好きになるはずなのに、何の感情も抱けなくて、何やってんだろうって。別れてからは男と付き合ってみたんだ、女の時³³は抱けないくらい幸福を感じた、幸せだった。心の底から好きだった。毎日幸せだったんだ

花純 いい人と付き合えたんだね

加藤 全然。同じクラスの人でさ、向こうも思春期だったから、

ふわふわした状態で付き合ってただよ

花純 そうじゃないかも

加藤 振られたんだ、中3の時。受験に集中したいからって言われて。

そんなのずるいじゃん、身を引くしかないじゃん。

そしたらそいつ、数週間後には彼女つくってたんだよ。

デートしてるの見かけて、息がでなかったよ。

受験に集中したいなんてつまらない嘘ついて、毎日毎日堂々と手を繋いで帰って

いくんだ。……胸が張り裂けそうだったよ。女と付き合ってるときは手を繋ぐのが嫌で振りほどいてたのに、あんなに羨ましくなるんだって思った

花純 ……酷いね

加藤 こんなこと、誰にも言えなかった。親にすら、いまだに言えてないんだよ。

俺の家は考えが古いからさ、一人っ子で男だから期待されてるの。

仲が悪ければって思うほど、2人とも俺を大事にしてくれて。

でもそんな親ですら恨んだ、恨んじやったんだよ。

どうしてまともに生んでくれなかったのって、

なんで俺はみんなと違うの、普通じゃないの、って

普通になれない自分自身も大嫌いで恨んじやった

花純 ……本当に酷いね、最低だね

加藤 そうでしょ

花純 君がだよ

加藤 え？

花純 君にも説教してあげようか？ 甘えてるって

加藤 ……甘えてるんだよ、だから他人の気持ちを考えず告白して振られて

花純 中本に？

加藤 気持ち悪がられたよ、目の前でもはっきり言われた、気持ち悪いって

花純 そんなことが

加藤 だからいじめなんかされてさ

花純 ……

加藤 ねえ、成人とか大人ってなんなんだろうね

花純 何？

加藤 17なんてさ、大人までまだ時間はあるのに

18で成人なんて言葉だけ

大人ってさ、いつからなんだろうね

思いやりができて大人になるって思ってたのに、現実はどうじゃないんだね

花純 思いやりができて大人か

加藤 猪原さんも、思いやりに出会えなかったんだろうね

花純 どうして？

加藤 あんなに絶望してたから

思いやりに出会えて、大人になっていくと思ってた

まだ、希望があるんじゃないかってどこかで信じてたのにな

花純 ……

加藤 ……もう、どうでもいいか

花純 どうでもいいってどういうこと？

加藤 俺はきつと大人になれない

花純 ……なれるよ、なっちゃうんだよ

加藤 社会の建前でしか大人になれない

本当になりたかった大人になれない

花純 なればいいよ、なればいいじゃん

加藤 ……本当は俺なんだ、殺したの

花純 え、どういうこと？

加藤 中本恒星を殺したの、俺なんだ

花純 は？

加藤 花純が階段から突き飛ばしたとき、恒星は生きてたよ

打ちどころがよかったんだと思うよ、痛さで呻ける元気はあった

花純 ……

加藤 そんな恒星を、俺は近くにあった壺をとって、殴って殺したんだ
花純 どうして

加藤 どうしてかわからない？

花純 わからないって言ったら？

加藤 突き飛ばす前、何の会話してた？

……恒星から告白されてたでしょ

花純 そういえば

加藤 恒星の口から出た君が好きって言葉、

羨ましくて嫉妬でおかしくなりそうだった

俺がほしかった言葉、君はいとも簡単に手に入れてしまうんだもん

羨ましいと思ってしまったし、簡単に口にしたあいつが

憎らしくもあった

花純 そんな、それで……？

加藤 それで？ 君にとってはそれで済むかも知れないね

何なら忘れてたくらいだもんね

花純 忘れてたって言うより、自分がやってしまったことの衝撃が……

でも、本当は私は殺してない……？

加藤 本当は罪悪感で潰れればいいって、潰してやろうって思った。

だから近づいた。近づいて、罪悪感を植え付けて、って考えて

こんなところまで来たのに、連れてきたのに、

道連れにしてやろうって思ったのに、おかしいな

花純 なにがおかしいって言うの？ ここまできて、まだ何がおかしいって言うの？

加藤 結局俺が潰れそうなんだ、ひとりで潰れてしまえそう

花純 勝手にひとりでだなんて思うなよ、巻き込んだクセに

勝手に私を地獄に巻き込んだくせに

加藤 いつもの1人で潰れていく感覚が、またしてるんだよ

花純 巻き込まれたくないけど、除外されるのも腹立つ

加藤 君はやり直せる

花純 は？

加藤 だって殺してないから

花純 ……

加藤 俺は殺したんだよ、殺しちゃったんだよ

君は殺してないけど、俺は殺しちゃったんだよ

人を好きになることが許されない

みんな当たり前にある権利をもらえない

こんな世界疲れちゃったよ

花純 ……

加藤 ねえ

花純 ……

加藤 ねえ

花純 ……なに

加藤 また1つ、最悪なこと言ってるいい？

最悪な置き土産、許してほしい

花純 甘えんな

加藤 ……

花純 聞くだけ聞いてあげてもいいけど

加藤 やっぱり優しいね

花純 なんかわかつくから聞くのやめようかな

加藤 やめる？

花純 ……こつちに委ねられてるの腹立つ。

早く話しなよ

加藤 俺は17歳で終わる

花純 おわる？

加藤は腰掛けてる岩から立ち上がり、ゆっくり海へと向かい歩いて行く。

そのまま波打ち際で足止まり、海を眺めている。

花純はついていこうとするも早々に諦め、岩に腰掛けたまま付近の小石を拾って投げたり、砂に指を使い何かを描いたりしている。

穏やかな波音が響いている。

加藤の声を聞いて、花純は顔をあげる。

加藤 俺は17歳で終わる、終わってやる

子どものままで終わるんだ

大人になんて、大人になんてならない、なってやらない

俺の心はまだ死んでない、好きな気持ちも、好きって言う感情も

他人への愛も思いやりもったまま死にたい

好きって気持ち尊重されないなんて、大事にしてもらえないなんて

理解され続けないなんておかしい

救ってくれないなら終わってやる

少し荒れた波音へと変わる。

再び加藤は海を眺めている。

花純も再び岩に腰掛けたまま付近の小石を拾って投げたり、砂に指を使い何かを描いたりしている。

しばらくして、加藤はゆっくりとした足取りで花純の座っている岩へと戻ってくる。

戻ってきた加藤の気配を感じて、花純は顔をあげる

花純 気は済んだ？

加藤 ……

花純 大空くん？

加藤は無言のままショルダーバッグから筆箱を取り出し、

さらに筆箱からハサミを取り出す。

花純はその光景をなんとなく見ている。

加藤は、ハサミを片手に、再び波打ち際まで全力で走っていく。

花純は先ほどと変わらずぼんやりとその光景を眺めている。

加藤 (海に向かい大きめの声で)次は普通になりたい！

俺のこの普通が許される世界になりたい！

海は、俺を、僕を、認めてくれるかな

加藤はハサミで首を刺す。

花純 な、に……

加藤は足下がおぼつかなくなり、姿勢が崩れていく。
なおも首を刺し続ける加藤。

花純　なに、してるの

花純は、とめに行こうとするも思うように体が動かず
ゆっくりと加藤に近づいていく

「やめて」「なにしてるの」「大空くん」と加藤に呼びかけ続けている。

加藤の体が横たわると、波が体に当たっている音が鳴る

花純　はやく、はやく海から離れてよ

傷口に塩水がはいるよ、病院に行こう。

今、今、救急車

砂の上を歩く音がする。

警察が「大丈夫ですか」と叫びながら歩いてくる。

警察の方を見る花純

花純　人が、人が！

警察　人が？

花純　波、波の、波の所に男の子が！

警察は加藤を見つけるとギョツとした表情を浮かべ

「大丈夫ですか」と叫びながら加藤の元へ走って行く

暗転

8 パトカー・車内(夕)

運転席に警察が座り、花純は後部座席に座っている

警察 何があったの

花純 ……

警察 ショックが大きすぎて、まだなにも話せないかな

花純 ……

警察 落ち着いたら、何があったか話して貰えるかな？

花純 (聞き取れるか否かの小声で) わからないんです

警察 え？

花純 わからないんです、全部

警察 わからない？

花純 彼が認められない世界も、彼が世界の進化を信じなかったのも

理解できないんです。同じ場所で生きていく理由なんてないのに

そこで囚われて悲観して、彼は自ら死にました、私への、もしくは世界への最悪な置き土産だそうです。本当に最悪ですよ

警察 彼とは長い付き合いだったの？

花純 長くて短い、短くて長い関係でした

警察 難しいな

花純 たった一日で、いろいろ巻き込まれました

今日やっと話したのに、それを感じさせない時間でした

警察 一緒にサボったのかな

花純 ……

警察 どちらにしても学校と親御さんには連絡はするから

隠し事はしないでほしいな

花純 サボりました

警察 やっぱり

花純 逃避行なんです、これは。

私が中本恒星を階段から突き落とすとして

加藤大空が壺で中本恒星を殴って殺したそうです。

本人が話してました。

そんな本人もさつき、自分でハサミを首に刺して死にました

海にこだわってたから、流されたかったのかな

警察 聞きたいことがいっぱいあるな

花純 ねえおまわりさん、素直に話したら偉いですよね

彼も一緒に素直になつてると思うんです

私達は大人でも子どもでもない、成人もしてない変な狭間にいるんです

今からでも、汚いだけじゃない、真つ当な大人ってやつになれますか？

暗転。

9 西校舎の階段の踊り場(9ヶ月後・夕)

明転。

制服の胸ポケットに花をつけた花純が

立ち入り禁止のテープをくくりぬけてやってくる。

階段に腰掛ける。

花純

卒業式終わったよー、後味凄い悪いけどね

私も普通の人生じゃなくなっちゃったよ、こんなこと経験してき

静寂な空間に、窓の外から鳥の鳴き声が聞こえる。

花純

2人はもうあったのかな、会っても仲良くなんてしてなさそうだね
ただね、2人には1つ、共通点があるよ

何だと思う？ それはね、2人とも私に迷惑かけたことだよ

あ、あとはね、私にはなかったけど、2人にはあったもの

自分の気持ちを誰かに吐き出せることだよ

好きって伝えられた2人は、

真っ当な大人のスタートラインにいたのかもしれないね

花純

あとね、あの日、猪原さんが通りがかった警察に私達のこと話したみたい。

だから警察の人きたんだって、大空が死のうとしてるの、

猪原さんは分かったのかも知れないね

花純

それにね、私もあれから壁にぶつかりながら成長してるよ

大学、愛知県の大学に合格したんだ。指定校推薦は断れたし、

愛知でやってみたいことみつけて、ちゃんと親に話して

私、ここを離れるよ、なんとなくじゃなくて意志をもって

私も、理解ある社会にしていくための1人として、自分の気持ちをもって

受け入れるだけじゃなくて、ちゃんと相手のための思いやりをもってみるよ

成長するよ、まだまだ

花純

次、また2人と会う世界はもっと優しい世界がいいな
恒星にちゃんと謝って、次は大空の手もとって、3人で話せたりするかな
誰も信じれない世界じゃなくて、もっと暖かくて優しい
これ以上はもう言わなくていいか

花純、ポケットの中からスマホを取り出し時間を確認する

花純

じゃあそろそろ、集合写真の時間だからいくね
また来世でね

花純は制服の胸ポケットについている花を外し、

階段の踊り場の端へ置く。

しばらくみつめたあと、花純ははけていく。

階段の踊り場に置かれた花にだけ照明が当たっている。

チャイムがなっている。